

# 序文



聖書は、ユダヤ教徒とキリスト教徒にとって永遠の至宝であり、イスラム教徒の聖典でもある。聖書には、その物語の舞台となった土地や、聖書の編纂者がひと目見たいと望んだ土地など、実に多くの地名が登場する。聖書の記述は、いずれも、固有の文化を育んだそれぞれの土地と深く結びついている。

しかし、聖書に克明に記された物語が実際にどのような時代背景や地理環境のもとで練り広げられたのか、簡単に想像できない場合が多い。アブラハムが、故郷メソポタミアを後にして、古代イスラエル時代の半農半牧生活に踏み出したのは、どんな意味があったのか。モーセはどうやって、奴隷となっていたイスラエル人をエジプトから連れ出し、「乳と蜜の流れる土地」へ導いたのか。聖書の物語を深く味わおうとすれば、当時の政治状況を理解するだけでなく、物語の舞台となった土地の自然と、その土地にひそむ危険性や風景の美しさを知り、その土地が肥沃であったか荒地であったかを知る必要がある。

本書は、聖書を読むうえで役に立つ背景知識を提供するために、地図、写真、年表、遺跡や遺物の図版を多数掲載した。聖書の物語の舞台となった土地と時代に親しむことによって、私たちは物語の意味とニュアンス、背後に込められた心情を読み取り、さまざまな場所と時代、状況のもとで書かれた聖書の内容をより深く味わうことができる。

紀元前587年以降、イスラエルが滅亡の淵に追い詰められた「バビロン捕囚」の時代に、聖書は大部の書物としてまとめられた。イスラエルの民は失われた故郷の思い出を心に強く焼き付け、エデンの園にも等しいその豊かな土地に戻ることを夢見た。故郷への帰還を願い続けたイスラエルの民は、やがて神の意思によって帰還が成就され、その土地が繁栄することを祈った。

新たな繁栄の時代が到来することを待ち望んだ民衆の願いを背景として、キリスト教が生まれた。イスラエルの地に生まれたキリスト教は、やがて地中海世界全域に伝播していく。新約聖書が述べているのは、最高権力を握る皇帝への崇拝に代わって、処刑されたラビ、つまりイエスを神の子とする信仰がローマ帝国で広がっていく物語である。

聖書の記述に、古代イスラエルの領土を超えたさまざまな土地が登場するように、聖書の物語は、旧約・新約聖書の時代を超えて後世にさまざまな影響を及ぼした。本書は、ビザンチン帝国やイスラムの時代に、聖書の物語がどう解釈されたかも紹介している。エルサレムの東でも西でも、人々は聖書の中に、生きることの意味や、輝かしい未来への希望を見出ただけでなく、聖書を通じて世界を理解し、未来への希望と困難を予測し、聖書というレンズを通して人類の存在意義を探究したのである。

ブルース・チルトン

[米ニューヨーク州バード・カレッジ高等神学研究所長]